# 幼馴染みとテスト前夜

御倉リョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼馴染みとテスト前夜

【Ｎコード】
Ｎ０２０２Ｐ

【作者名】
御倉リョウ

【あらすじ】
「というわけで私は彼氏が欲しいの」
「……何が、というわけだよ」
二回目の期末試験を明日に控えた夜、勉強中に幼馴染みの小早川（こばやかわ）帆希（ほまれ）は何の脈絡もなく、そう言い放った。
――――これは僕と幼馴染みのテスト前夜の対談である。

## （前書き）

どーも、御倉リョウです。
この作品は以前に『ライトノベル作法研究所』様で投稿した物を加筆修正した物です。
少しでも皆様の暇つぶしになれば幸いです。
それでは、張り切ってどうぞ！

「というわけで私は彼氏が欲しいの」
「……何が、というわけだよ」
二回目の期末試験を明日に控えた夜、勉強中に幼馴染みの小早川帆希（こばやかわほまれ）は何の脈絡もなく、そう言い放った。
場所は僕の部屋。部屋の中央に鎮座しているガラステーブルに向かい合うようにして数学のテキストを開いていた。壁掛け時計の針の音が室内に響く。
「聞いていなかったの？」
どうやら僕は話を聞いていなかったらしい。それほどまでにサインコサインタンジェントに集中していたのか。話し声が聞こえなくなるくらいまで集中していたのなら明日のテストは案外大丈夫かもしれない――などと思考していると帆希はこれ見よがしに溜め息を吐きながら額を押さえた。
「悪い悪い。今度はちゃんと聴くからさ」
謝罪の念を言葉で伝えると帆希はその長い黒髪をかきあげ、しゃらりと揺らしながら、
「実は――――何も言ってないのよね」
「僕の謝罪の言葉を返せ！」
無意味に溜めやがって！
「まあ、理由なんてなくて何となく人であれば誰でも良いから彼氏が欲しくなったの」
「……」
何気ない帆希のこの言動に僕は激しく動揺していた。理由は単純明快かつ明朗快活（違うか）。
僕は目の前の少女、小早川帆希に特別な感情を抱いている。
有り体に言えば、好きなのだ。

幼馴染みというモノは異性として意識しないものだとよく言われるがそんな事はない。断じてない。幼馴染みといえど異性は異性、しかも帆希は容姿端麗、成績優秀、品行方正（僕の前以外は）、運動神経抜群、とまるでチートなステータスを有する。惚れない方がおかしいのだ。

まあ、僕はそういう外面より内面的な部分が好きであって――つまるところ、『全部』が好きなのだ。帆希は僕の気持ちに気付いていない。鈍感だからね。

「……誰でもって、マジ？」

妙に小さい声になってしまったが震えなかっただけマシだろう。帆希は『マージカルマジジマジジンガー』とよく分からないことを言った。

ごくり、生唾を飲む。……これは告白するべきか？　そう例えばこんな風に――

※ここから先は僕の妄想。

「帆希、実は僕はお前が好きなんだＺＥ☆」

キュピーン↑歯が煌めいた。

「ごめんなさい」

「な、何故だ！？　人であれば誰でもいいのだろう！？」

帆希は俯けていた顔を上げ、僕を見下すような目つきで鼻で笑った。

「貴方、自分を人間だと思っているわけ？　はん、ちゃんちゃらおかしいわね」

「ほ、帆希？」

「このミジンコ！　いやミジンコ以下！　無細胞生物！　むしろ無機物、童貞！」

「ぐあぁぁぁぁぁっ！」

最後の言葉が一番響く！

――ここまでが僕の妄想でした。

「ちょっと、京介。いきなり突っ伏してどうしたの？」

顔を上げると帆希が心配そうな顔で僕を見ていた。

「うぁぁー、童貞は言い過ぎだー」

「いや、言ってないし。何で泣いてるの」

しまった。妄想の出来事がショック過ぎた。涙を拭い、『何でもない』と言う。

やめておこう。もしもフラれたらもうこの関係は終わってしまうかもしれない。こうやって向かい合うようにして勉強をすることも、一緒にご飯を食べることも、朝起こしに来てもらうこともなくなるかもしれない。

何より、何よりも彼女の笑顔が見れなくなるのが辛い。

まだ、幼馴染みという関係に縋り付いてしまおう。臆病者と罵られたって構わない。だって仕様がないじゃないか、告白という行為はとてつもなく怖いんだ。

だからこそ僕は――

「――やめといた方が良いんじゃないか？」

「え？」

「好きでもないのに付き合うなんて相手を馬鹿にしてるみたいだしさ」

自分の矮小さに嫌気が差す。僕はフラれるのが怖くて告白をしないクセに帆希と誰かが付き合うのが嫌でこんなことを言っている。

「まだ学生なんだから恋人なんていらないだろ」

「……そうかもしれないわね」

帆希はそう言って僕の目を見た。何故かその目には落胆や失望の類が浮かび上がっていた。

「一つ、いいかしら」

「……何だよ」
思わず不機嫌そうな声で応答。しかし帆希は気にしてないらしく、いつも通りのクールな声で話しだす。
「京介は私をよく鈍感と評するけど、一番鈍感なのは京介なのよ？」
「は？　僕のどこが鈍感なんだよ」
僕の質問には答えず、数学のテキストと筆記用具を手に、立ち上がる帆希。
「さて、私そろそろ帰るわ。もう夜も遅いし」
「え、お、おい。待てよ」
帆希はドアではなく窓を開ける。彼女の家は僕の隣であり、僕の部屋の隣が帆希の部屋なのだ。玄関から出るより窓から出た方が早いのだ。って、説明してる場合ではない。
「おい、帆希！　質問に答えろよ」
「うるっさいわねー。放火するわよ」
「放火！？　僕の家になんてことするんだ！？」
「違うわ――」
帆希は一旦言葉を区切り、自慢の黒髪をかきあげる。そして溜めに溜めた一言を僕に放った。
「――アンタ自身を放火するのよ」
「猟奇的だー！？」
叫び終わると同時に帆希はひょいと僕の部屋から自分の部屋に移った。
「お休み、京介。良いナイトメアを見なさい」
「ナイトメアって悪夢だよなぁ！？」
良い悪夢って何だよ。
「具体的には風景が赤くて熱い夢ね」
「明らかに放火の夢だよな！？」
「正夢にならないように気を付けなさい」
「お前の行動になっ！」
などとツッコミを入れている隙に窓を閉められた。

『全く、これで告白しないなんてとんだチキンハートね。こうなったら拉致監禁のプランCに移行するしか――』
帆希の部屋から何やら独り言が聞こえるが今はそれどころではない。
「帆希ー！　僕のどこが鈍感なんだよ！」
しーん。無視する気か奴は。
「小学六年生までおねしょをしていた小早川帆希ちゃーん。質問にこた――ごはぁっ！？」
窓が開けられたと思ったら目覚まし時計が投げつけられた。回避できずに鼻っ面に炸裂する。突然の衝撃に後ろへひっくり返り、ガラステーブルに後頭部を強打。
「ばか」
顔を羞恥と憤りの朱色に染め、帆希は短く言い放った。僕の意識はそこで途切れた。

余談というか蛇足だが、僕が目を覚ました時、暗かったはずの空は白みを帯びていた。ロクに勉強ができなかった僕は追試を受ける羽目になった。

## （後書き）

小話どうでしたか？　感想や意見などがありましたらお寄せ戴けると幸いです。ではまた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0202p/

幼馴染みとテスト前夜

2011年7月5日03時28分発行